

吉田泰治氏を偲んで

吉田泰治さんは去る5月18日彼岸へ旅立たれた。まだ69歳、思いもかけない早すぎるお別れとなった。

吉田さんは昭和5年3月岩手県で誕生され、昭和28年東北大学理学部地球物理学科卒業後直ちに仙台管区气象台で気象庁生活をスタートされた。昭和40年から58年まで、途中2年間の福岡管区技術部長時代を除いて16年間、電子計算室（現数値予報課）で勤務された。この間前半はモデル開発に専念され、後半は補佐官あるいは室長として、数値予報技術を基盤に予報業務の近代化に御尽力された。

昭和34年に開始された日本の数値予報業務のなかで吉田さんは第2世代に属する。この世代の重要な仕事はバランスドモデル（準地衡風近似及びバランス風近似モデル）からプリミティブモデルへの移行で、あらたな技術的問題としてイニシャリゼーション、パラメタリゼーション、領域側面境界の扱いがあった。準地衡風近似モデルにプリミティブモデルを埋め込むシステムで側面境界の扱いに一義的な“解”は無く、ノイズ抑制は当時としては厄介な問題であった。プリミティブモデルの導入と1日2回ルーチンの実施（昭和48年）で数値予報は名実共に予報業務の基盤となった。

昭和57年のHITACM200Hへの計算機更新を室長として指揮された。それまでの数値予報のための、いわば電子計算室の計算機という、クローズドシステムから、全庁的な計算センターとしての機能も併せ持つオープンシステムへの移行であり、TSS端末も初めて導入された。また北半球域、アジア域モデルに加え、日本域微格子モデルの導入、台風モデルのプリミティブモデルへの変更がなされ、CDFによる地方への資料送付も、質・量とも大幅に改善された時で、この電計室の画期に大きな指導力を発揮された。

電計室長から気象研究所予報研究部長へ転出され、その後は気象衛星センター所長、札幌、仙台、東京と3つの管区气象台長を歴任され、気象業務の指導にあ



たられた。予報研究部長時代、日本域微格子モデルを研究所に移植し、更に非静力学モデルの開発を強く推進された。これにより予報研究部で、伝統あるメソ気象の解析的研究と数値シミュレーションによる研究の両輪がそろいメソ気象の研究が大きく発展した。吉田さんの卓抜な指導力が発揮された一例である。

吉田さんは科学的思考、学問を大切に、その基盤の上に立つ業務展開を強く意識された方であった。天気図描画に埋没していた頃、“電子計算室では技術開発の主要テーマは必ず気象学会等で発表して、学問的立場からの批判と検討を経る努力をしている。予報現場で学問（学会）との接点をどう考えているのか？”という質問を受けたのが今でも記憶に残っている。

退職直前の大手術の後、病院とは1日たりとも縁の切れないご生活であった。在職中の研ぎ澄まされたような鋭い議論と厳しさはすっかり影をひそめていたが、お会いすればHolton (dynamic meteorology) の最新版と旧版の違いやカオスと気候予測の話題などを持ち出され、旺盛な知的好奇心は相変わらずで、全く不意をつかれたお別れだった。

ご冥福を祈る。

(財)高度情報科学技術研究機構 山岸米二郎